

女子部中等科1年 英語

「英語の音とリズム」

ジャンセン美穂

英語には特徴ある美しい音とリズムがあります。教科として英語の学びを始めた1年生の1番大きな目標を、その美しい響きに魅了される体験を通して英語の音をまねて自ら発話してみる事と、英語の持つ特有のリズムを体感し楽しむ事においています。今回は、その学びに繋がるものとして「英語の音とリズム」というテーマで発表を行いました。

I. はじめに

中等科1年生は、4月のスタート時点から元気な声でしっかりと音読をする事が出来ていました。しかも、ただ単にまねるだけでなく、英語のもつ音やイントネーションを楽しみながらまねている様子には、外国語を学ぶ意欲と積極的な姿勢が感じられました。また、よい耳を持つと同時に臆する事なく上手にまねて発音してみる事は、言語を学ぶ上でなくてはならない大切な要素であると考えます。今回1年生にとって学業報告会は初めての経験でしたので、手探りの状態で一步一步進んでゆく事となりましたが、クラス全体で協力し発表をするという大きな経験を通して、生徒ひとりひとりが達成感を感じ、更なる深い学びへチャレンジする自信を得る事が出来たように思います。

II. 報告会までの学習

報告会での発表は、1学期の学びを重ね、積み上げてゆくものを目指しました。その意味で1学期からその下地となる学習を授業に組み込んでゆくように努めました。5月にアメリカのWestmont Collegeから学生のグループを学園にお迎えした際には、数名の学生達に中等科1年生の授業にも来て頂いて、擬声語の学びとして動物の鳴き声の日英比較を試みました。8種類の動物の写真を黒板に掲げ、初めに中等科1年生から日本語による鳴き声の提示を行い、次にWestmont Collegeの学生達からは同じ動物の鳴き声を英語で披露してもらう手順を進め、万国共通の鳴き声であるはずなのに言語によって表現の仕方が異なる事実に気づく経験をしました。英語の勉強を始めて間もない時期であったため、発話として使

える英語の語彙も表現も共に限られていたましたが、それでもその他に一緒にゲームや歌等を楽しみながら、普段あまり交流する機会のない英語圏からの若い学生達の使う自然な英語に触れる良い機会ともなりました。

また、1学期の授業の後半では、数回にわたって授業の最後の部分を使ってjazz chantsをいくつか導入し、練習をしました。ジャズ・チャンツ(jazz chants)とは、ジャズと音声英語を組み合わせた歌のようなもので、聞いたり話したりする能力を伸ばすことをねらった指導法で、ジャズのリズムに合わせて、英語のイントネーションや強勢、リズムを自然に学習する事を目的としています。いずれのチャンツも短く単調な言葉の繰り返しによって構成されていますが、生徒達は実際に声を出しリズムをとる事によって、英語特有の楽しいリズムを感じたようで、学業報告会への良い導入となりました。この際に、英語を一定のリズムで発音するためには、リンキング(Linking=連音)のルールが適用される事の説明も合わせて行いました。



Westmont Collegeの学生との交流

III. 報告会への準備

報告会への準備は、生徒が発表の際に使う実際の報告文に繋がられるようにワークシートを用いて進めました。つまり、学習のためのワークシートを完成させてゆくことによって、それが報告文となる形式をとったという事です。初めに取り組んだ事は、夏休みの課題の1つを確認する事でした。課題とは、英語のテキストである *New Crown* の会話文 (2学期に学習のレッスン3課分) を付属のCDでよく聴き、リンキングしていると思われる箇所を見つけてくるものですが、それを確認しながら、リンキングの最も顕著な3つのパターンについて学習しました。合わせて子音と母音についても学びました。

次に、5カ国(ガーナ、オランダ、インドネシア、アメリカ、イギリス)からクラスにお客様をお迎えし、一口に英語と言っても色々な状況や必然性(母国語、公用語、外国語としての英語)によって英語が話されている現状について学ぶ共に、それぞれの国の方が話される英語の発音や特徴についても考えてみました。この経験を通して英語は多国間、多文化の間でコミュニケーションの道具となっているという事実を認識する有意義な学びとなったと同時に、いずれの方もキリスト教の信仰者であるために、お一人お一人のお人柄や具体的なお話を通して大きな恵みを頂く経験ともなりました。この交流の後で生徒達に書いてもらった感想文を、生の体験として後の報告会発表の際の報告文として実際に活用する事も出来ました。

擬声語に関しては、夏休み前に学習した動物の鳴き声の音の比較を表にまとめながら、擬声語(オノマトペ)が国によって異なる理由を模索すると同時に、日本語という言語を使用して生活している私たちの耳は、日本語という言語の特性に適応した聴覚を獲得していて、同じ動物の鳴き声を聞いても、私達は自分たちの聞き取れる音の範囲内でその音を表現している事について学びました。

英語と日本語のリズムに関しては、様々な人の形を描いた絵を参考にしながら、音節の数で文の長さが決まる日本語に対して、強勢のある単語の

数で文の長さが決まる英語との違いについて学びました。練習として3拍子のリズムを手で取りながら、長さの異なる5つの英文を同じリズムで言ってみる練習もしました。クラスでの学びのまとめとしては、英語特有のリズムやリンキングを実践するべく、ジャズチャンツと英語の歌を1つずつ選び、繰り返しその練習に励みました。

表書きには比較的早く取りかかる事が出来ましたが、模造紙を張り合わせる作業から大きな紙に文字や絵をレイアウトすることなど全てが初めての体験であったために、予想以上に時間がかかりました。それでも自分の分担を終えた家族が他の家族の作業を進んで手伝う等の協力があちらこちらで見られ、多くの生徒達が放課後遅くまで残り熱心に表書きをしてくれました。時間のかかる作業においても妥協せず丁寧に粘り強く取り組めたのは1年生1人1人の賜物の集結であるように思われました。家族の枠を超え、そして寮生も通学生も1つになって完成させた表の数々は、「表書きは楽しかった!」という素直な気持ちに反映される素晴らしい出来栄となりました。

IV. 報告の内容

家族毎の発表の順番と内容は以下の通りです。

- (1) 挨拶(リーダー)
- (2) ガーナ、インドネシア、オランダからお客様をお迎えして学んだこと(C家族)
- (3) アメリカ、イギリスからお客様をお迎えして学んだ事(F家族)
- (4) 擬声語(動物の鳴き声)の日英比較(A家族)
- (5) 日本語と英語のリズムについての説明と例の実践(E家族)
- (6) クラス全員でジャズチャンツ
(Grandma's Going to the Grocery Store)
- (7) リンキングの概念について説明(G家族)
- (8) 教科書の例文を用いてリンキングのきまり[1]と[2]について説明(H家族)
- (9) 教科書の例文を用いてリンキングのきまり[3]についての説明と聖句の説明(D家族)

(10) 歌 This Little Light of Mine の歌詞
(第1~4節) の説明 (B 家族)

(11) 全員で This Little Light of Mine を歌う

(12) 挨拶 (副リーダー)

[C 家族] [F 家族]

以下は報告文として使用した生徒の感想です。

- ・ ガーナの方が話す英語には、あまり抑揚が感じられなかった。
- ・ 外国語として英語を学ばれたインドネシアの方の話される英語は、私達の話す英語のようにゆっくりで、発音が分かり易かった。
- ・ アメリカ人の英語には聞き慣れているせいか、子音がはっきりと聞こえた。
- ・ イギリスの方が話される英語は滑らかな感じだったが、聞き取りにくい感じがした。

[A 家族]

Cats say 「ニャー」 in Japanese, but they say “meow” in English.

Dogs say 「ワンワン」 in Japanese, but they say “woof woof” in English.

Horses say 「ヒヒーン」 in Japanese, but they say “neigh” in English.

Pigs say 「ブーブー」 in Japanese, but they say “oink oink” in English.

Sheep say 「メーメー」 in Japanese, but they say “baa baa” in English.

Cows say 「モー」 in Japanese, but they say “moo” in English.

Mice say 「チューチュー」 in Japanese, but they say “squeak squeak” in English.

Roosters say 「コケッココー」 in Japanese, but they say “cock-a-doodle-doo” in English.

[E 家族]

英語と日本語のリズムの違いを説明するために様々な人の形を使って説明をしました。資料に載っていた図を基本に、E 家族はそれを更に発展させて自分たちでオリジナルのチャートを作成しました。このチャートを提示する事によって、日本語は1つ1つの音節がほとんど同じ長さで読まれ音節の数

で文の長さが決まるのに対し、英語は強勢の置かれる単語の数で文の長さが決まる事をより楽しく表現する事が出来ました。

[G 家族]

リンキング (発話の際に1つ1つ独立している単語を個別に発音せずに、文として言い易いように意味単位毎に繋げて読んだり言ったりする事を意味し、[連音]とも言う)の説明と、H 家族の発表する具体例への導入を行いました。



英語と日本語のリズムの違い

[H 家族]

リンキング (Linking) の起こる2つのパターンについての説明を行いました。

① リンキングで1番良く見られるパターンは、前の単語が子音で終わり、それに続く単語が母音で始まる場合に起こる例です。

(例) take it clean up is it

② 2つ目のパターンは、1つ目の単語の終わりが [p b t d k g] のいずれかの子音 (閉鎖音) で終わり、それに続く単語の初めも子音で始まる場合に起こるリンキングの例で、このようなリンキングでは、閉鎖音は脱落し次の音に移行して発音されます。

(例) big stadium sit down favorite sport

[D 家族]

リンキングの3つ目のパターンを説明しました。

③ 3つ目のパターンは、1つ目の単語の最後の子音と、次に続く単語の初めの子音が同一である場合に起こるリンキングの例です。このような場合、1つ目の子音は発音されずに次の音に繋

がってゆきます。

(例) What time is it? Mine is next to it.

この説明の後、最後にクラスで合唱する This Little Light of Mine の元になっている聖句を英語で紹介しました。

[B 家族]

This Little Light of Mine の歌詞 4 節を紹介し、簡単に日本語での意味も加えました。歌詞は、新約聖書マタイによる福音書第 5 章 14 節から 16 節の箇所に基づいていますが、この歌はゴスペルソングとしても教会等で広く歌われているものです。

第 1 節の歌詞は、

This little light of mine, I'm gonna let it shine.

This little light of mine, I'm gonna let it shine.

Let it shine, let it shine, let it shine.

(要訳) 私はこの小さな私の光を輝かします

第 2 節の歌詞は、

Hide it under a bushel? No! I'm gonna let it shine.

Hide it under a bushel? No! I'm gonna let it shine.

Let it shine, let it shine, let it shine.

(要訳) 私はこの小さな光を隠してしまわずに輝かせます

第 3 節の歌詞は、

Don't let Satan blow it out, I'm gonna let it shine.

Don't let Satan blow it out, I'm gonna let it shine.

Let it shine, let it shine, let it shine.

(要訳) 私はサタンにこの光を消させてしまわずに輝かせます

第 4 節の歌詞は、

Let it shine till Jesus comes, I'm gonna let it shine.

Let it shine till Jesus comes, I'm gonna let it shine.

Let it shine, let it shine, let it shine.

(要訳) イエス様が来られるまで私はこの光を輝かせます

V. 終わりに

今回の学業報告会は、担当させて頂いた私も、

また生徒達にとっても初めての経験でした。発表に向けて数ヶ月のプランを立てる際に心がけた事は 2 つあり、この学びが学業報告会という 1 日のためだけのものに終わってしまわないという事と、学びの過程に楽しめる要素を出来るだけ織り込みたいというものでした。語学の学習には、コミュニケーションが成立した際に得られる喜びと、そこから先へ進んで行きたいというモチベーションが伴わなくてはなりません。喜びとは、特に異文化間コミュニケーションを指し、またモチベーション(特に、「内的モチベーション」)を喚起するには、異文化に対する更なる興味や関心がある根底になくなくてはなりません。その意味において、今年度イギリスから来ていた teaching assistant のアレックスさんやジョージさんとの定期的なクラスでの交流や他のお客様方々との交流は、非常に意味深いものとなり感謝しています。いずれの方達も、クラスにおける言語活動の趣旨をよく理解して下さり、生徒達に愛情と関心をもって接して下さいました。このような心と心を通い合う貴重な体験は、英語という枠組みを越えて生徒達の心の中に貴重な種として蒔かれたに違いありません。

また、1 年生でありながら、私の考えるところを的確に理解して、更に良いものに作り上げるための努力と工夫とを惜しまず、時間をかけて国旗を制作したり、大きな表書きに取り組んだりしている生徒達の様子には、こちらが力を頂き感謝する場面も多くありました。私にとっての大きな収穫は、通常の英語の授業では到底見る事のできない生徒達の特別な賜物や能力を準備の過程で発見する事が出来た事です。報告会直前には、準備も大詰めを迎え、皆疲れが溜まっていると思われましたが、そのような時でも最後まで歌やチャンツのアレンジの仕方への意見も活発に出されました。

学業報告会後には、「楽しかった」「またやりたい」という声が聞かれ、その様な率直な声こそが、本人達が全力投球した事の証であると思いました。それは、あらゆる可能性や学びに対しての 1 年生の食欲さをもよく象徴するものであり、生徒達の日々の生活の原動力になっている事を確信しました。

VI. 参考文献

- ・ こどもクラブ 『いろいろな国のオノマトペ』
世界のことばあそび 旺文社
- ・ 『絵でわかる英語じてん 5』学習研究社 1997年
- ・ English Sounds, English Minds 桐原書店
- ・ Carolyn Graham Jazz Chants
Oxford University Press

